

史記桃源抄の副詞語彙について

来 田 隆

一 本稿の意図

抄物は、漢籍・仏書・国書等をテキストにして、それを講釈した草案と記録とを整理したものであり、講釈という行為が介在する為に、そこに見られる言語には、俗語と文語との混在が認められる。

したがって、抄物の言語を、室町時代語の普遍の実態と直接的に結びつけることはできない。本稿は、このような抄物の言語の実相を、語彙の面から分析しようとする試みである。

資料として、史記桃源抄を用いる。周知の如く、本資料は天岩牧中の史記講義を桃源瑞仙が聞き取った部分（序及び補史の三皇から、本紀は、周本紀第四の武王の条まで、列伝では、司馬相如列伝第五七の途中まで）と、牧中の講義の存しない部分について、桃源が自身の講義の草案を追補した部分とから成っている。所謂、「聞き」と「手控」とが合わさっているのであって、このことは、本資料の語彙の多様性が予測されるのである。ただ、既に指摘されている如く、桃源の抄の部分には、先行の竺雲等連の漢書抄の影響が強く認められ、牧中の聞き部分にも、竺雲の漢書講義の影響が認められる（注一）という事実は、十分注意されねばならない。

史記桃源抄の語彙の性格を、他の抄物との比較によって明らかにするために、玉塵抄（永禄六年の識語、慶長二年写）（注二）と比較する。更に、抄物以外の口語資料として、キリシタン口語資料を取り上げた。資料には天草版伊曾保物語（文禄二年刊）（注三）を用いた。但し、これらの二資料が、ともに史記桃源抄成立（文明九年）から遅れること百年前後の成立であることは、比較の際に十分考慮されねばならないであろう。

さて、異なる言語体系の語彙を相互に比較する時、両者に於ける示差性が顕著である分野語彙として、副詞語彙がとり立てられる。したがって、本稿では、史記桃源抄の語彙総体の内の、副詞語彙をとりあげることとする。

なお、調査に用いた史記桃源抄のテキストは、京都大学付属図書館蔵の、清原宣賢等の書写に成る写本二十冊（うち、仮名抄十八冊）である。

二 史記桃源抄の副詞語彙

次に、史記桃源抄の副詞語彙を、分類し、整理して掲げる。副詞の分類体系として所謂陳述副詞という用語は用いない。呼応の有

無という分類の観点は、その他の副詞分類と次元を異にするからである。また、擬声擬態の副詞を特立する。それは、これに属する副詞語彙の異なり語数が多いということのみならず、擬声擬態の副詞は、それが係わつてゆく述語の意味的な範囲が大体に於て決定されているということ、換言すれば、これらの副詞語彙は、固有の述語の意味を自身のうちに潜在的に含んでいるという特別の性格が認められる語彙であるという理由による。

また、史記桃源抄の副詞語彙を、天草版伊曾保物語（以下「伊」と略称する）、玉塵抄（以下「玉」と略称する）の副詞語彙と比較すると、次の四類に整理される。

A類 「伊」にも「玉」にも存する副詞

B類 「伊」には存するが「玉」には存しない副詞

C類 「玉」には存するが「伊」には存しない副詞

D類 史記桃源抄のみ存する副詞

史記桃源抄が、牧中の講義の間書（以下「牧」と略称する）と、桃源の手控（以下「桃」と略称する）とから成ることは先に述べたが、この両者の言語には相違が存することは当然予想され、又、その報告もある（注4）。そこで、右の四分類の更に下位分類として、(イ)「桃」と「牧」との両方に存する副詞、(ロ)「桃」の方にのみ存する副詞、(ハ)「牧」の方にのみ存する副詞の三類に分ける。

なお、一つの副詞が、程度量の副詞と情態の副詞との二つの用法を持っているというような場合には、便宜上、用例の多い方に属せしめた。

表記が二種類以上存するものについては、最も用例の多い表記を代表させて、他はカッコ内に順次入れた。用例数は二例以上のもの

には算用数字で示した。「桃」と「牧」との両方に存する(イ)類の用例数については、それぞれの用例数を掲げるべきであるが、紙数の都合上それを区別せず、合計用例数を掲げた。（注5）（必要に応じて、それぞれの用例数を掲げることにする。）濁点は、本資料では、副詞については、ツブト（フの仮名の左上、上声の濁点）一例のみであつて、他は私に付したものである。

玉塵抄、天草版伊曾保物語との比較で、表記上の相違がある場合は、特に注意を要する場合は \wedge に入れて注記したが、多くは注記を省略した。

一 思考判断の副詞

A類 (イ)ナニト(ナント・何ト・何ニト) 213、ナゼニ(何ゼニ) 174、エ134、ゲニ62、必(必ズ) 44、ナニトテ(ナントテ・何ニトテ・何トテ) 21、若シ(モシ・若) 19、ナニサマ15、況ヤ(況) 11、カマイテ(カマヘテ) 11、ナンゾ(何ゾ) 11、マコトニ(誠ニ) 8、イカニモ5、タトヒ(タトヘ) 2、(ロ)カヘツテ、(ハ)無し。以上15語

B類 (イ)ナニカ(何カ・何ニカ・ナンカ) 159、ヨモ19、ナ14、セメテ8、トモカウモ7、中々6、トテモ4 (ロ)イカサマ14、マシテ9、イカガ2、イカデカ、サスガ \wedge 「玉」サスガ \vee (ハ)何様 以上13語

C類 (イ)イカニ(何ニ) 90、ナニトモ(ナントモ・何トモ) 79、チャウド54、(ロ)実ニ6、(ハ)イクラ4 以上5語

D類 (イ)マサシフ(マサシウ・正シク・正ク) 10、ヤワヤ8、是非ニ6、治定5、(ロ)蓋シ(蓋) 4、果シテ(果タシテ) 3、イカントモ2、豈、イカニイカニ、ナジカハ、モシヤ、(ハ)一定、仮令 以上13語

二 程度量の副詞

A類 (イ)皆299、只(唯)253、アマリ135、大イニ(大ニ・大)62、サノミ60、チツトモ50、アマタ11、(ロ)サホド3、サシテ (イ)無し。以上9語

B類 (イ)アマリニ38、イカウ6、(ロ)イトド3、サシモ3 (イ)無し。以上4語

C類 (イ)チツト189、捻シテ35、イカホド18、一チ9、大略8、キヤメテ \wedge 「玉」キワメテ \vee 2、悉ニ2、(ロ)大槩3、トリワケ(トリハケ)3、盡(尽)2、(イ)ナンボ(ナンボウ)4、イツパイ、チト、チヨツト 以上14語

D類 (イ)少々(小々)7、随分 \wedge 「玉」ズイブンニ \vee 7、マツト4、一切ニ \wedge 「玉」一切 \vee 2、(ロ)甚3、イカホドニ2、ソコバク2、全タク(全ク)2、アゲテ、サホドニ、十分ニ \wedge 「玉」十分 \vee 、ソツクリ、大抵、特ニ、一シヲ、僅ニ \wedge 「玉」ワツカ \vee (イ)至テ 以上17語

三 時間関係の副詞

A類 (イ)先ツ(マツ・先)154、マダ138、ヤガテ127、イツモ90、常ニ59、已ニ(既ニ)58、結句(ケツク)33、未24、遂ニ(終ニ・ツイニ・遂)21、モトヨリ11、ヲリフシ5、(ロ)次第ニ18、シキリニ (イ)シバシ 以上14語

B類 (イ)所詮5、(ロ)速ニ、タビ \wedge ニ \wedge 「玉」タビ \wedge \vee 、度々 \wedge 「玉」度々ニ \vee (イ)至ニ 以上5語

C類 (イ)サキニ(先ニ)14、アゲクニ13、ニハカニ7、スグニ4、(ロ)更メテ、漸々ニ2、トキトキ、畢竟 (イ)一旦4、一度2 以上10語

D類 (イ)マウ34、初メテ(ハシメテ・初テ・始メテ・始テ)8、始終6、次第 \wedge ニ4、久々ニ2、(ロ)イツシカ、早速ニ、スグサマニ、時 \wedge (イ)一偏ニ2、万カ一3、イツカ、稍々、早々ト \wedge 「玉」サウ \wedge \vee 以上14語

四 情態の副詞

A類 (イ)カウ(カフ・カク)139、別シテ(ヘシテ・ヘツシテ)96、我ト63、猶(ナラ・尚)44、自然ニ20、又(マタ)13、更ニ(更・サラニ)12、ヤウ \wedge 6、互ニ5、ヒソカニ(間^{ヒソカニ}・間^{ヒソカニ}与)4、各々2 (ロ)シカ \wedge ト5、モツハラ(専ラ・専)4、旁(カタ \wedge)2、アリ \wedge ト、強テ、吾レサキニ (イ)無し。以上17語

B類 (イ)ヨク(ヨウ・能ク・ヨフ)204、自然5、サン \wedge ニ \wedge 「玉」サン \wedge \vee 3、(ロ)コトサラニ \wedge 「玉」コトサラ \vee 3、一ヘニ2、アマネク (イ)無し。以上6語

C類 (イ)シカト48、一々ニ29、イツタウ29、アチコチ26、ワザト23、直ニ8、一向ニ(一コウニ)9、自ラ8、ユル \wedge ト5、ヨク \wedge 7、一々2、内々2、蒙々ト2、(ロ)ヤス \wedge ト5、涯分(カイブン)4、敢テ、ウマ \wedge ト、細々、自ラ (イ)チリ \wedge ニ5、重々ニ2、忽然ト、参然ト、妄ニ、以上24語

D類 (イ)ヨウモ(ヨクモ・ヨフモ)60、マツスグニ7、猶モ6、ヤハリ4、卒忽ニ4、ナマジイニ3、シツカト3 (ロ)細々ニ2、シキ \wedge ニ2、更々ニ、シラ \wedge ト、尚シ、ヒロ \wedge ト、我レ先ニト、晏然ト、豁然ト、鏗然ト、儼然ト、殺然ト、参差ト、紛々ト、メタ

ト、妙ニ、(イ)別々ニ5、自然ト4、アマ \wedge ト、コマカニ、ソゾロ、ノヒ \wedge ト、ハシ \wedge ト、ムカウヤプリニ、ムマ \wedge ト、ヤミ \wedge ト、翁々ト、虚寒ト、肆然ト、萃々ト、卒然ト、洒々ト、素々

ト、懼然ト、ラウ〜ト、以上42語

五 擬声擬態の副詞

A類 (イ)ソツト35、(ロ)無し。以上1語

B類 (イ)無し。(ロ)ガツバト4、(ハ)ハタト、ヒヨツト 以上3語

語

C類 (イ)キツカト40、チャツト30、スキト16、ソツト11、クワツト4、サツト4、トウト3、ウル〜ト2、クル〜ト2 (ロ)キツト4、スルリト2、キツハト、キラリト、クルリト、クルリ〜ト、

クル〜ト、ザツト、チャウ〜ト、チャツチャト、ハラリト、

(ハ)スタ〜ト、ニツコト、ハラリト、ハル〜ト、ヒタト、ホロリト、ムザ〜ト、以上27語

D類 (イ)フツト23、スツト20、ハツタト8、スルリ〜ト4、セカ〜ト4、チャト4、ツント4、スル〜ト4、コセ〜ト3、

ヅバト2、ムズト2、メタト2、スツタリト2、(ロ)チャツ〜ト9、サラリト2、チャ〜ト2、ウカラト、ウツカラト、ヲボ〜ト、キラリ〜ト、クダ〜ト、クラ〜ト、ソツトチツト、ソロ

リト、チツクチクト、チツコト、チツ〜、チャ〜ト、チャツト、ソツト、チャツ〜ト、チラリト、※ツアト、トツト、ノサ〜ト、

ハタ〜ト、ヒヨウト、ブラ〜ト、ヘシト、ホウト、ホシ〜ト、

ホタ〜ト、ボツキト、ミシト、ムカ〜ト、ムクト、ムツタト、

(イ)チツ〜ト2、ツツト2、フツ〜ト2、カツ〜ト、キカト、

キラ〜ト、グラ〜ト、サク〜ト、サツハト、ジロリト、スラ

リ入「玉」スラリト、スン〜ト、ダク〜ト、チツクラト、ツ

ンツ、ヒツタト、ヒヨツ〜ト、フツクト、フラ〜ト、ホエリト、

ホツクリト、ムツタラト、ワチ〜ト、以上69語

以上が史記桃源抄の副詞語彙の総てである。これを異なり語数でまとめると、次のようになる。

	A類	B類	C類	D類	合計
一思考判断の副詞	15	13	5	13	46
二程度量の副詞	(33)	(38)	(11)	(28)	(100)
三時間関係の副詞	9	4	14	17	44
四情態の副詞	(20)	(9)	(22)	(39)	(100)
五擬声擬態の副詞	14	5	10	14	43
合計	(35)	(12)	(23)	(30)	(100)
合 計	17	6	24	42	89
	(19)	(7)	(27)	(47)	(100)
	1	3	27	69	100
	(1)	(3)	(27)	(69)	(100)
	56	31	80	155	322
	(18)	(9)	(26)	(47)	(100)

(注、カッコ内は百分率をあらわす)

右表に依って、次下の事柄が明らかになる。史記桃源抄の副詞語彙は、異なり語数で322語である。玉塵抄でのそれは521語である(注6)。これに比して、史記桃源抄の副詞語彙は、玉塵抄のそれよりバラエティに乏しいことが分かる。副詞の種類に就いて見ると、五の擬声擬態の副詞に於いて最も異り語数が多い。天草版伊曾保物語、玉塵抄との比較という観点からすると、三者に共通するA類は18%に過ぎない。ここに属する副詞は資料を越えて広く用いられる副詞

であると考えられる。ここにはチツトモ、イワンヤが属しており、これらの副詞を抄物に特徴的な副詞とすること(注7)の非なることも明らかになる。天草版伊曾保物語と共通するB類も、A類に準じて把えることができ、これらは一の思考判断の副詞に於いて33%、38%と最も高率を示し、五の擬声擬態の副詞に於ては1%、3%と極めて低率を示す。抄物資料の方にのみ存するC類、D類に就いて見ると、D類、即ち史記桃源抄にのみ存するものが47%にも達する。そして、副詞の種類から見ると、一の思考判断の副詞ではC類、D類はそれぞれ11%、28%と最も低率を示し、五の擬声擬態の副詞では27%、70%と最も高率を示す。しかも、擬声擬態の副詞ではD類が70%にも達している。

右表から、史記桃源抄の副詞語彙の内、擬声擬態の副詞語彙の多様性が明らかになったが、さらにC類、D類を細かく具体的にそこに属する副詞語彙を見てゆくと、そこには、漢文訓読特有語を出自とする副詞、漢語に基づく副詞が偏在していることに注目されるのである。そこで、以下、これらの三つの観点から、史記桃源抄の副詞語彙を検討しよう。

三 漢文訓読語系の副詞語彙

そもそも漢文の訓読を前提としている抄物の言語に、漢文訓読語(注8)の影響が認められるであろうことは容易に推測し得るところである。史記桃源抄の副詞語彙の内、漢文訓読語系(漢文訓読特有語)の副詞語彙は次の通りである。

A類 (イ) 況ヤ(況) 11、タトヒ(タトヘ) 2、已ニ(既ニ) 58、
未24、更ニ(更・サラニ) 12、互ニ5、ヒソカニ(ヒソカニ) 間―与

(ウ) 4、計7語 (ウ) シキリニ、モツハラ(専ラ・専) 4、計2語
(イ) 無し。合計9語

B類(イ) 無し。(ウ) 速ニ、(イ) 無し。合計1語

C類(イ) キヤメテ2、悉ニ2、計2語 (ウ) 盡(尽) 2、更メテ、敢テ、計3語 (イ) 無し。合計5語

D類(イ) マサシフ(マサシウ・正シク・正ク) 10、初メテ(ハシメテ・初メテ・初テ・始メテ・始テ) 8、計2語 (ウ) 蓋シ(蓋) 4、果シテ(果タシテ) 3、イカントモ2、豈、全タク(全ク) 2、僅ニ、時トキ、尚シ、計8語 (イ) 至テ 計1語 合計11語 以上総計26語

これらの副詞語彙は、使用頻度の低いものが多いが、A類に属するものも10語あり、それらは使用頻度の高いものが多い。それにしても、C類、D類をあわせると全26語のうち15語までがここに属するのである。

史記桃源抄内部での、これらの副詞語彙の用いられざまを見るに、(イ) 即ち、「桃」と「牧」との両方に存するものが11語、(ウ) 即ち「桃」の方にのみ存するものが13語、(イ) 即ち「牧」の方にのみ存するものが1語となっていて、「桃」の方が漢文訓読特有の副詞を多用していることが分かる。「桃」が所謂手控的に、より多く文章語を取り入れているのである。

しかし、これらの漢文訓読語系の副詞語彙も、本資料での用法を見ると、漢文訓読特有語としての本来の用法をそのまま保っているわけではない。例えば

① 況王者タル者ノ上テハ、猶不足ナソ(58才17一一(注9)) 「牧」

況ヤチツトモ方術ヲセウモノハ、チツトハ言フ事カアタライテ
ハソ(3オ16九「桃」)

②蓋周室衰微シテ、記録ナントモ、シカくトモナイホトニ……
(82オ4一「桃」)

③イカナレハ先王ノ皆崩スルトキハ尚シ徳ヲ後世ニノコシ法ヲ末
代ニ垂ル事ヲコソセラル、モノテアルニ……(17ウ3四「桃」)

①の「況ヤ」は、特定の呼応を失っているし、②の「蓋シ」は、
平安中期以後は平叙文で結ぶが、古代の訓法を伝承保持する漢籍の
訓法には推量形で結ぶものである(注10)の、本資料ではそれが
認められない。③の「尚シ」も同類である。又、音転説を起してい
るものに「キヤメテ」がある。

④ワルイ事ヲシテ、キヤメテタノシウテ子々孫々マテモ不レ絶者
カアルソ(5ウ14一「牧」)

為右——キヤメテヨウ治タソ(46オ1一五「桃」)

「キヤメテ」が、院政末から鎌倉時代の文献、特に口語性の強い
文献に見出されることについては報告があるところである。(注11)

「桃」と「牧」とを比較して、「桃」の方に、より文章語の影響
の強いことが指摘できたが、これに関連して、体言十二という語構
造の副詞について両者で比較すると、注意すべき相違が認められる。
本資料で、ニを伴う形と、伴わない形との両形が存するものは、
次の通りである。用例数は(「桃」・「牧」・合計)の順に掲げる。

アマリニ(35・3・38) | アマリ(91・44・135) | イカホドニ(2
・0・2) | イカホド(14・4・18) | コトサラニ(3・0・3) |
コトサラ(0・2・2) | 一向ニ(二コウニ)(8・1・9) | 一向
(1・1・2) | 自然ニ(11・9・20) | 自然(4・1・5) | サホド

ニ(1・0・1) | サホド(3・0・3) | 一々ニ(21・8・29)
一々(1・1・2) | 悉ニ(1・1・2) | 一盡(尽)(2・0・2)
細々ニ(2・0・2) | 細々(1・0・1) | 次第ニ(18・0・18)
| 次第(1・0・1)

右のうち、両形が「桃」か「牧」かのいずれか一方にのみ存する
ものを除くと、次の三種の副詞が注目される。

①言ハ、物カタクナリ立テ、アマリニ極レハ、ヤスク、カツハ
トナルソ(9オ7一九「桃」)

アマリイタマシウカナシイホトニ(10ウ4二三「牧」)

②漢書ヲ聞ク者イカホトニアツツラウナレトモ、綿谷一人……
(4ウ8六「桃」)

上計トハ、郡国カラ京ヘ年貢カ、イカホト上タナント云事ヲ
ツカサトルソ(13オ10一三「牧」)

③コトサラニ為臣ト云テ、罪シタ語ナリ(70オ8三「桃」)

日本ノ天神七代、地神五代ト云モ、コトサラスクナイソ(11オ
3三「牧」)

これらは、いずれも、ニを伴う形の方が、「桃」に於て多用され
ているのである。漢文訓読特有語の語構成の一として、体言
十二があり、右の事実は、「桃」の方が、より漢文訓読特有語的構
成の副詞を好むという傾向を示すものであろう。ところで、漢文訓
読に於て、ニを伴う、あるいは伴わないという副詞が存し、前者
は漢籍訓読語、後者は仏書訓読語という関係で対応しているもの
がある。そして、漢籍訓読語は仏書訓読語に比して、より古態を示す
ものである(注12)が、史記抄での右の事実と、このこととは無関
係ではないであらう。今後、検討を要する事柄である。

四 漢語に基く副詞語彙

漢語に基く副詞が抄物で多用されることも先学の指摘のあるところである。本資料での用例を整理すると次のようになる。

A類 (イ) 結句(ケツク) 33、別シテ(ヘシテ・ヘツシテ) 96、自然ニ20、計3語 (ロ) 次第ニ18、計1語 (ハ) 無し。合計4語

B類 (イ) 所詮5、自然5、計2語 (ロ) 度々、計1語 (ハ) 無し。合計3語

C類 (イ) 捻シテ35、一チ9、大略8、一々ニ29、イツタウ29、一向ニ(一コウニ) 9、一々2、内々2、蒙々ト2 計9語 (ロ) 実ニ6、大槩3、漸々ニ2、畢竟、涯分(カイブン) 4、細々、計6語 (ハ) イツバイ、一旦、一度、重々ニ2、忽然ト、參然ト 計6語

合計21語

D類 (イ) 是非ニ6、治定5、少々(小々) 7、随分、一切ニ、始終6、次第(ニ) 2、卒忽ニ4、計8語 (ロ) 十分ニ、特ニ、大抵、早速ニ、細々ニ2、妙ニ、晏然ト、豁然ト、鏗然ト、儼然ト、殺然ト、參差ト、紛々ト、メタト 計14語 (ハ) 假令、一定、一偏ニ2、万カ一3、稍々、早々ト、別々ニ、自然ト、翳々ト、虚寒ト、肆然ト、萃々ト、卒然ト、洒々ト、素々ト、懼然ト、ラウ()ト 計17語

合計39語 以上総計67語

以上67語の漢語に基く副詞が存在する。これは、全副詞322語の20%にも当たる。そして、これらの副詞は、天草版伊曾保にも存在するA類、B類には、合せて7語に過ぎず、やはり、抄物に於て多用されるものであることが確認される。

語構造から見ると、殆どが、漢語、漢語十二、漢語十トの三類に

整理される。そして、それぞれの、史記桃源抄内部での分布を見ると、漢語、漢語十二の二種のもの、(イ)(ロ)(ハ)にほぼ偏りなく存するのに対して、漢語十トの形のもの、(ロ)と(ハ)とに偏在している。しかも、(ロ)8語、(ハ)13語となっているのであって、(ハ)の方により多く存する。トを伴うものより「ニがつくようになった形容詞語幹の漢語は、より日常語的に把握されていると解される」(注13)とは、忽然^{ニシテ}——忽然トシテ、虫ニナル事モアリ(39ウ8一一「牧」)という例が存在する(原文のニシテを、トシテと言ひ換えている)ので、一概には言い得ないにしても、これらの副詞は、漢文原文に存するものをそのまま取り入れるものも多く、当時の日常語とはとうてい考えられぬものが殆どである。

第三節で、「桃」と「牧」とを比較して、「桃」の方がより文章語的性格が強いことを指摘したが、漢語に基く副詞、就中、漢語十ト形の副詞についてみれば「牧」の方にも亦、文章語の影響が認められ、たとえ「間書」的な「牧」ではあっても、漢文訓読調を好む面のあることが分かるのである。

五 擬声擬態の副詞語彙

第三節、第四節に於て、史記桃源抄の副詞語彙を、文章語(漢文訓読語)からの影響という面から見てきた。しかし、他方に於て、擬声擬態の副詞語彙が栄えていることは既に述べたところである。

史記桃源抄のみならず、抄物に擬声擬態の副詞が多いことは、やはり、金沢文庫蔵解脫門義聴集録倉末期写本のごとき講義録にもそれが多用されている(注14)ことに繫つていふことである。

ただ、ここで注意すべきことは、史記桃源抄の擬声擬態の副詞語

棠100語のうち、次の3語を除いて、すべて「ト」を伴っているという事実である。トを伴っていないのは、次の如くである。

- ①此ハ一王ノ事カ、サノミ多モナウテ、チツくアルホトニ、名ヲ不言レハ、マキルルホトニカ、如是シルイタケナソ (67ウ17 三「桃」)

②土崩ハ世界カスラリ崩ソ (18オ10一五「牧」)

- ③梁ト趙トノ戦處ヘハイカイテ、ツンツチカウテ大梁ノ留守ノ處ヘイツテ…… (18オ17一一「桃」)

右の三語は、柳田征司氏が既に指摘され、トは原理的に情態性を支えるものであり、これらのトを伴わないものは、既に程度副詞化したものとされた。又、トを伴わぬ擬声擬態の副詞が、抄物では漢書抄、史記抄から見えはじめ、少しくだった天文期の詩字大成抄、玉塵抄となると10語以上の例が認められ、この頃既に一般化していることとされた(注15)。トの有無を、氏のように通時的に把握することができる面のあることも事実であるが、大藏流狂言における擬声擬態の副詞語彙を見ると、虎寛本にも虎明本にも、トを伴わぬものが抄物資料の場合とは比較にならぬ程、多用されているのである(注16)。時代の下の狂言資料と、史記桃源抄とを直接比較するには問題があるにしても、この狂言資料での事実は、トを伴わぬものが、トを伴うものより、より口語的性格が強いということを示していると考えられるのである。

そもそも、擬声擬態の副詞は、先に述べたように、本来、述語的性格をもっている。とすれば、このトは、情態性ではなく、その叙述性を支えているものと解されるのであり、換言すれば、トを伴うものは、伴わぬものより、より判断的なものである(注17)。そし

て、抄物とは、あくまで漢文のテキストの講釈であり、テキストの文・語句を講釈したものである。擬声擬態の副詞も、講釈の方便として用いられているのであって、いわば、事柄の叙述の方便として用いられているのである。したがって、抄物では、必然的に、叙述性を支えるトを落すことが少ないことになると考えられるのである。加えて又、抄物が漢文訓読文の講釈であることから、それが口ことばで行われても、文章語の気味あいは残ることになる。このような理由で、本資料の擬声擬態の副詞は、トを伴うものが殆どであるという結果になったと考えられるのである。

六 結 語

史記桃源抄の副詞語彙を、漢文訓読語系の副詞、漢語に基く副詞、擬声擬態の副詞という観点から検討を加えてきた。そして、漢文訓読文の講釈であるという抄物の基本的な成り立ちから、史記桃源抄の副詞語彙は、それが口ことばで講釈が行われた(あるいは行われる)ものではあっても、背後に文章語(漢文訓読語)が存するため、日常語からは少し離れたところで安定を見ているものであることが認められた。

しかし、右のまとめは、極めて、素朴で概括的であり、今後に残された問題が多い。まずは、文章語系の副詞と、口語系の副詞とが互いにどのような意味領野を分担することによって共存しているかということが明らかにされねばならない。そこから、本格的語彙論が始まると考えている。

(昭和47年11月30日稿)

〔付記〕本稿は、藤原与一先生の御指導のもとに調査を進めたもの

を纏めたものであって、昭和47年度広島大学国語国文学会秋季研究会(11月11日)で口頭発表したものをもとに成ったものである。学会の席上では、小林芳規先生、山内洋一郎氏、柳田征司氏から種々の御教示を賜わった。又、一旦成稿後、小林芳規先生の御指導を頂いて、稿を改めることができた。記して厚く御礼申し上げる。

注1、柳田征司「史記抄の本文について」漢書抄との関係から――

「国語国文論集1 安田女子大学日本文学科

2、出雲朝子「抄物の副詞―抄物語彙の性格についての試論―」言語と文芸65号に於て、玉塵抄(巻一から巻十まで)の副詞語彙が掲げられている。それに依った。

3、京都大学文学部国語学国文学研究室編「文禄二年耶蘇会板伊曾保物語 本文・翻字・解題・索引」を用いた。

4、出雲朝子「抄物におけるう行四段活用動詞の音便形について」佐伯梅友博士古稀記念国語学論集 昭和44年6月

5、副詞の認定については、テキストの漢文原文に存する副詞を引用して、その副詞そのものを講釈しているような例は採らなかつた。又、擬声擬態の副詞などで、「スル」と結合して複合動詞を形成しているものは、今、副詞の用例として採っている。資料間の比較に於て、擬声擬態の副詞は、玉塵抄の場合、注2論文に依っているため、単純な語形の比較のみに依っている。尚、史記桃源抄の副詞語彙の調査は、一回のみであるので遺漏のあることを恐れている。

6、注2出雲論文。

7、注2出雲論文。

8、漢文訓読特有語については、築島裕「平安時代の漢文訓読

語につきての研究」参照。室町時代に於て、漢文訓読特有語ということがどこまで言い得ることであるかは、個々の語詞について検討すべきことであるが、出自あるいは系統という観点からするならば、今、漢文訓読特有語ということを経験にし得ると考える。

9、用例の所在は、丁数・表裏・冊数の順に掲げる。印刷の都合上、小字表記等、原文の表記のままでないところがある。

10、小林芳規先生「金沢文庫本春秋経伝集解における平安初期漢籍訓読語の残存」訓点語と訓点資料二五輯(「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」所収)

11、小林芳規先生「中世片仮名文の国語史的研究」広島大学文学部紀要 特輯号3、昭和46年3月

12、注10小林先生御著書三九四頁。

13、寿岳童子「抄物の文選読」国語国文 昭和28年10月。

14、注11小林先生論文。

15、「抄物に見える擬声擬態の副詞」愛媛大学教育学部紀要(人文・社会科学)第四巻第一号

16、佐々木峻「大蔵流狂言資料における擬声擬態語彙について」広島大学教育学部紀要第一部第二〇号

17、阪倉篤義「語構成の研究」三七二頁。

―― 広島大学助手 ―